



Data

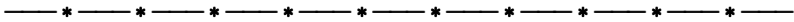
監督・脚本：ロベール・ゲディギヤ
ン

出演：アリアヌ・アスカリッド/
ジャン＝ピエール・ダルッサ
ン/ジェラルム・メイラン/
マリリン・カント/グレゴワ
ール・ルブラン＝ランゲ/
アナイス・ドゥムースティエ
/アドリアン・ジョリヴェ/
ロビンソン・ステヴナン/キ
ヤロル・ロシエ/ジュリー＝
マリー・パルマンティエ

👁️👁️ みどころ

本作はヘミングウェイの小説『キリマンジャロの雪』の映画化ではなく、港町マルセイユを舞台とした人情話。労働組合の委員長としてリストラの指揮をとった主人公は自らのクビも切り、今は妻や子供、孫たちと静かに暮らしていたが・・・。

今、国や社会に不平不満を持ち、対策を求める声は大きいですが、1人1人の人間が持つ善意とは？また、その行動力とは？ラストに見る夫婦の「ベクトルの一致」に思わず涙するとともに、それが自己変革と社会変革の第1歩だということをしっかり確認したい。



■□■このタイトルから何を連想？■□■

フランスのロベール・ゲディギヤン監督の名前は知らなかったが、『キリマンジャロの雪』はアーネスト・ヘミングウェイの小説として有名。しかし、本作はその映画化ではなく、1966年にパスカル・ダネルが作曲し歌って大ヒットした『キリマンジャロの雪』という曲をモチーフとし、フランスの港町として有名なマルセイユを舞台とした心温まる家族劇（人情劇）らしい。そのストーリーづくりにはヴィクトル・ユゴーの『哀れな人々』を使ったそうだが、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』はよく知っていても、『哀れな人々』を私は全然知らない。さて、そんな本作のポイントは？

■□■20名のリストラを、主人公はいかに？■□■

本作の主人公は、長年港湾労働者として働き、今は労働組合の委員長になっている初老

の男ミシェル（ジャン＝ピエール・ダルッサン）とその妻マリ＝クレール（アリアヌス・アスカリッド）。この夫婦には既に2人の子供と3人の孫がいるが、映画は構造的な不況の中、労使間で合意した20名の人員削減をくじ引きで決めるシーンから始まる。苦悩の表情を浮かべながらミシェルは1人ずつ名前を読み上げていたが、中には自分の名前も。労働組合の委員長という立場であれば、自分だけはくじ引き外にすることも可能だったはず。ミシェルの片腕として同じ職場で働いている、妹ドゥニーズ（マリリン・カント）の夫ラウル（ジェラルド・メイラン）はそう詰め寄ったが、くじ引きという苦渋の選択をしたミシェルにとっては、リストラ者の中に自分を入れるのは委員長としてのプライドだったらしい。

フランスでは4月22日に大統領選挙の投票が実施されたが、予想どおりサルコジ候補もオランド候補も過半数に至らず、決戦投票に持ち込まれることになった。マルセイユの港町で今日



(C) AGAT Films & Cie, France 3 Cinema, 2011

こんな人員削減をやらなければならなかったのは、サルコジ元大統領の失政のせい？たしかにそうかもしれないが、本作はそんな政治的テーマを追及するのではないから、くれぐれも脇道にそれないように。

■□引退も悪くない？しかし・・・■□

団塊世代の私は今63歳だが、弁護士業務(?)は何やかやと忙しい。民間企業に勤めていた同級生たちの多くは既に定年退職し、悠々自適(?)の生活を送っているが、それってホントは大きな社会的損失では？ミシェルの退職は労働組合の委員長として自ら下した苦渋の決断だから、頻繁に家を訪れてくる娘フロ（アナイス・ドゥームスティエ）夫婦とその孫、息子ジル（アドリアン・ジョリヴェ）夫婦とその孫と楽しい時間を過ごすことで気持を紛らわしているが、やはりどこか寂しそう。妻のマリ＝クレールにはそれがひしひしと伝わっていたが、ある日ミシェルとマリ＝クレールが妹夫婦のドゥニーズとラウルとトランプゲームに興じていると、強盗に押し入られるという大事件が発生！退職後すぐに開催してもらった結婚30周年記念パーティーで、ミシェルとマリ＝クレールがサブラ

イズプレゼントとしてもらったアフリカのキリマンジャロへのチケットや現金を強奪されてしまったのだ。

ミシエルの右腕のケガ程度で済んだのは不幸中の幸いだったが、なぜ今俺たちがこんな目に！これではせつかくの引退生活も水の泡。ミシエルがそう考えたのは当然だが、ミシエルたちの引退生活ぶりをよく知っているようだったあの2人組の強盗は一体何者？そんな疑問が膨らんでいた時、警察からもたらされた犯人像にミシエルたちはビックリ！

■□■犯人は？なぜこんな犯行を？反省は？■□■

犯人が同じ職場で働いていた若手のクリストフ（グレゴワール・ルブラン＝ランゲ）だったことにミシエルは大ショックを受けたが、よくよく聞いてみるとクリストフの言い分にもそれなりの理屈がある。定年までまだ時間があっても既にミシエルは家もあるし家族もいるから儉約すればその後の人生を生きていけるが、やっとありつけた職からポンと放り出され、次の職場が見つからないクリストフには生きていく術がないということだ。

ミシエルが尊敬する人物は、1905年にフランス社会党を結成したジャン・ジョレス。ミシエルはその教えを忠実に守りながら組合活動に従事し、今回のリストラ騒動もくじ引きという最も公正な方法で処理したつもりだったが、クリストフがこんな愚かな犯行に至ったのが、ジュール（ヤン・ルバティエール）とマルタン（ジャン＝バティスト・フォンク）という2人の幼い弟たちを養わなければならなかったためということが見えてくると、次第に同情心や社会的連帯の考え方が広がってくることに。しかし、今さら告訴を取下げても事態は変わらないらしい。そんな状況下、ミシエルは一体ナニを考え始めたの？他方、長年連れ添った妻のマリ＝クレールは、独自にどんな行動を？

■□■国が悪い？社会が悪い？しかし、それでも・・・■□■

クリストフの言い分を聞いていると、その「社会的弱者」としての不平不満の並べぶりはたしかにわかりやすい。しかし、こんな単純な罪を犯せばすぐに逮捕されることぐらいわからないの？また、懲役15年という刑をくらえば、それでなくても生活していけない2人の弟たちは一体どうなるの？そんなことも考えられないの？逮捕されたクリストフの言い分は国が悪い、社会が悪い、組合が悪いの一面倒だが、それって少しおかしいのでは？

弁護士生活37年になる私にはすぐにそういうクリストフに対する批判の気持が湧きあがってくるが、長年の組合活動の中で「連帯」をテーマにしてきたミシエルの発想はそうではないらしい。それが本作のミソだ。2人の幼い弟たちには隣に住む女性アグネス（ジュリー＝マリー・パルマンティエ）が食事を差し入れていたが、クリストフの罪が確定すればこの2人は自動的に保護施設へ？ミシエルたちが何もしなければきっとその通りだろうが、そんな状況下でもなお人間として何かできることがあるのでは・・・？ミシエルが今考えているのは、キリマンジャロ行きのチケットを現金に換えて、それをある資金に使うということだが、それってかなり無理な話？それとも・・・？

■□■なぜこんな気持ちに？なぜこんな行動を？■□■

ミシエルの妻マリ＝クレールはパートのヘルパーとして働いていたが、これからはパートの回数が増えるらしい。マリ＝クレールからそう聞かされたミシエルは「あ、そう」とだけ答え、気に留めていなかったが、映画を観ている私たちにはマリ＝クレールがヘルパーの勤務時間を増やしたのではなく、アグネスの応援として幼い弟たちの食事の世話に乗り出す姿が見えてくる。同情や哀れみの気持は人間誰もが持っているものだが、さてあなたなら強盗犯の2人の幼い弟たちに対してそんな気持を持つことができる？さらに、その気持をこんな行動に移すことができる？

あの強盗事件によって日常生活にも支障をきたすことになった妹ドゥニーズの夫であるラウルは「絶対に犯人を許すことができない」と息巻いていたが、どうもミシエルのみならず、マリ＝クレールもそんな気持は薄いようで、ジュールとマルタンに対してスクリーン上で見せる2人の行動は想定外のものばかり。人間1人1人が持つ善意や、その行動なんてたかが知れたものかもしれないが、本作に見る2人の行動を見てみると……。ミシエルはなぜ、そしてマリ＝クレールもなぜこんな気持に？そして、2人もなぜこんな行動を？

■□■この「ベクトルの一致」に、思わず涙・・・■□■

ヴィクトル・ユゴーの詩『哀れな人々』には、最後に「19世紀のブルターニュの貧しい漁師が隣家の2人の遺児を引き取る決心をしますが、その時すでに妻は2人を家に連れてきていたという実に感動的な場面」があるらしい。そして、プレスシートの監督インタビューでロベール・ゲディギャン監督は、「そのような相互理解と、夫と妻が同時に選んだ寛大で、善良な選択。私は、これが映画のラストとして相応しいと思いました」と答えている。しかし、本作ラストにはそんな感動的なシーンが登場するから、それに注目！私が生まれ育った松山市は山の上に松山城がある中堅都市だが、海も近いからよく海辺で遊んだものだ。しかし、ミシエルとマリ＝クレールが暮らすマルセイユの町はホントの港町だから、冒頭のリストラのシーンをはじめ、海辺がよく語らいの場として登場する。ラスト近くに登場する感動的なシーンも、その舞台は海辺だ。

ジュールとマルタンが住む家からの帰り道、1人海辺に座って海を見ているマリ＝クレールを発見したミシエルは、ある決心を打ち明けようとしていたが、その決心とは？マリ＝クレールはこのところずっとミシエルに内緒である行動を続けていたが、それは家族の誰にも迷惑をかけるものでもなかった。しかし、ミシエルの決断は2人の子供夫婦と3人の孫と楽しく暮らしている現在の家族構成に大きな変化をもたらす重大なものだ。しかし今、ミシエルの決心を静かに聞いていたマリ＝クレールとミシエルの前に現れたのは……。ミシエルとマリ＝クレールが互いに強い信頼で結ばれていることはストーリー展開上明らかだったが、コトここに至ってこの「ベクトルの一致」に、思わず涙……。

2012（平成24）年5月2日記